

平成28年度 人間発達文化学類 私費外国人留学生入試問題

専攻名	人間発達専攻	科目名	小論文
-----	--------	-----	-----

資料を読んで、次の問に答えなさい。

問1 この文章を400字以内で要約しなさい。

問2 傍線部(a)「<いいわけ>は、この反省と内省に蓋をしてしまいます」の意味を、自分の「いいわけ」の経験を具体的に挙げながら600字以内で説明しなさい。その際、自分の例示した「いいわけ」が、傍線部(b)「<いいわけ>は、大きく三つの形に分けられます」以下で述べられている3つの形のどの「いいわけ」にあたるかについても、解答中に明示しなさい。

資料：帯木蓬生『生きる力 森田正馬の15の提言』

(出題にあたり、原文の一部を変更している)

注：資料文中の森田正馬とは、神経症に対する精神療法である森田療法の創始者である。森田療法は現代では神経症の療法を超えて、がん患者のメンタルケアをはじめ、学校現場や矯正施設など、幅広く応用されている。

いいわけ

サイドカーに三味線をのせ、あちこちに教えに行く、八十歳の三味線のお師匠さんに会ったのは、三十年くらい前でしようか。

八十歳と三味線、ハーレーダビッドソンのサイドカーの組み合わせが、実に新鮮でした。お弟子さんが百人以上はいると聞いて、思わず口をついて出た質問がありました。

上手になるのは、もともと才能と素質がある人ですか、それとも、よく稽古をする人ですか、と訊いたのです。

返ってきた言葉は、実に簡単でした。

素直な子です、とのお師匠さんは答えたのです。

へえーと内心でうなりました。人は素直であるだけで、三味線の腕があがるのだと、びっくりしました。素質も才能も、稽古量も、〈素直さ〉の前では、何の重みももっていないのです。

当惑顔に気がついて、お師匠さんは言葉を継ぎました。

頑固な子、ひとりよがりの子は、こちらの言うことを聞きません。ひとりよがりどころなに練習しても、下手な道を突き進むだけです。そうになると、素質も才能も、あつてなきがごとしです。頑固さも同じです。

なるほど、と腑におちる思いがしたのを、昨日の出来事のように思い出します。

以来、〈素直な心〉の反対は何だろうか、と、ずっと考えてきました。

頑固、ひとりよがりも、〈素直〉の反対側にある言葉ですけれど、今ひとつ対立語としての迫力がありません。

実は、〈素直〉の反対は〈いいわけ〉なのです。いいわけは、進歩の芽をことごとく食いつぶします。

進歩のない人、同じ失敗を性懲りもなく繰り返す人を、ちょっとだけ観察してみましよう。

鉢植えの植物が勢いをなくしているのを指摘されたとき、水やりの担当係がどう答える

のか、多様です。

「毎週二回、言われたとおり月曜と木曜にちゃんと水をやっていました」。この返答もいいわけです。週二回の水やりを言いつけられたからといって、それを墨守すればいいとはいえません。冬と夏では、水やりの加減は違ってくるでしょうし、一回の水やりも、コップ一杯の量にするか、半分の量にするかで、違ってきます。

鉢の下に置いてある受け皿に水がたまっていると、根腐れの心配も出てきます。それを注意されても、「週二回の水やりは、ちゃんとしていました」と答えるのでしょうか。もしそうであれば、早晚、その植物は枯れるでしょう。

植物が枯れても、「ちゃんと週二回の水やりは欠かしませんでした」と、当の本人が答えれば、〈いいわけ〉ここに極まれりです。

一事が万事で、こういう人は、他の面でも、臆面もなく失敗を重ねるに違いありません。植物に虫がついているよ、と指摘されても、その人はこう答えるはずで

「言いつけられたのは水やりで、虫がついているかを見ることではありません」

なるほど、見事な〈いいわけ〉です。この〈いいわけ〉で、本人は、責任をすりと回避しています。

枯れた葉を取り除かず、そのままになっているのを注意されても、蛙の面に小便で、何

の反省もありません。水やりは、言いつけどおりやっていたので、落ち度はないと答えるはずで。

逆に、〈いいわけ〉をしない対応はどうなるのか、考えてみると、その差の大きさに驚かされます。

水やりにもかわからず、葉の勢いがなくなつたとすれば、水が多すぎたか少なすぎたかです。「あ、すみません。これから気をつけます」と答えると、次回からの水の量も加減するはずで。冬は、週一回の水やりに変更してもいいのかもしれない。

その際、自然に受け皿にたまっている水にも、眼がいくようになるでしょう。同時に、水をやりながら、枯葉がないかや、葉に虫がついていないか、などにも気を配るはずで。〈いいわけ〉は、嘘と同等と考えて構いません。

「失敗は成功のもと」と、という格言を知らない人はいないでしょう。ところが、失敗が成功に結びつくのに、条件があるのを知っている人は、そういません。失敗が成功に至るには、その間に、反省と内省がなければならぬのです。〈いいわけ〉は、この反省と内省に蓋をしてしまいます。

〈いいわけ〉には多くの種類があります。人という存在が、いかに〈いいわけ〉をしてきたかの事実が、その種類の多さに反映されています。

(b) 〈いいわけ〉は、大きく三つの形に分けられます。

第一が、「私がやったものではありません」で、最もよく使われる手口です。その代表例は嘘です。自分がしたのに、そうではないと白々しく嘘をついて否認します。首を横にふつて声をあららげれば、より嘘は完璧に近づき、相手は黙るよりほかありません。

嘘をあからさまにつきにくい場合は、「そんなこと知りません」とアリバイを前面に出す手もあります。「そこになかったので、分かりません」と、かぶりをふつてもいいでしょう。物理的に事件の現場になかったのですから、犯人は私ではない、無関係ですと、微妙なシラを切れます。

嘘も使わず、アリバイづくりもしないでいいやり方は、責任転嫁です。「それはAがやりました」と直接名指しをしてもよく、「Aさんたちがそこにいたので、そのうちの誰かがしたのでしょう」とぼかしても構いません。あるいは、「そんなことをするのは、子供でしよう。大人はしません」と、さらにぼかすやり方もあります。さらには「私はしていません、誰がしたかも知りません」と言つて、嘘にオブラートをかけて、暗に誰かに責任転嫁をする巧妙な〈いいわけ〉もあります。

第二のやり方は、「たいしたことではない」と事態を過小化する方法です。「たかが一時間違っただけじゃないか」と、待っていた友人に言ったり、「たかが花瓶ひとつが割れた

だけです」と、使用人が主人に言うのです。

過小化の見本は、小中学校でよく問題になるいじめです。いじめられて生徒が自殺したあと、いじめた側の生徒が事情聴取を受けて、「あれはいじめではなく、遊びでした」と平気で言うのもこの類です。

虐待された子供が亡くなり、逮捕された親が一樣に言い逃れするときも、この過小評価が使われます。「虐待などではなく、しつけでした」

似たような(いいわけ)に、正当化もあります。これには必ず理由づけが伴います。この方法では、(いいわけ)された側は少しも非がないのに、何だか非はこちら側にあるような雰囲気になり、形勢が逆転します。

原子力発電所の炉心溶融で、原発推進派が使う手口はこれにあてはまります。「原発が悪いと責めるが、これまでそのおかげで安い電気料金で快適な生活ができたじゃないか」と言われると、こちらの旗色がにわか悪くなります。

「たいしたことじゃない」の窮極の形は、相手をけなしたり、罪を相手になすりつけるやり方です。試験で不合格になっても、「そもそもあの問題が悪かった」、「あんなひっかけ問題を出す教師など、教師ではない」になります。

この手口は、婦女暴行で捕まった犯人が時として使います。「あんな短いスカートをはいて、胸丸出しで暗がり歩いていたから、ついその気にさせられたんだ」と、取調室でうそぶくのです。

第三の(いいわけ)の形は、「それはそうですが、でも……」です。前段階で自分の非は多少なりとも認めたくなくて、「でもしかし」が常に強調されます。

その手始めは、「そうせざるをえなかった」です。ここでは超能力的な力が常に引用されて、「魔がさしたのです」や「ついついほかのことを考えていたので」とか、「無我夢中でつい」が頻用されます。

次に来るのが、「そんなつもりではなかった」です。「彼女を泣かせるつもりではなかった」とか「冗談で言ったままでですよ」といいわけされると、ついついこちら側も、「ああそうですか」と思い、相手の思惑どおりになります。

「はいそうです、しかし」の三つめの方法は、「本来の私ではなかったのです」で切り抜けるやり方です。ここで(いいわけ)の根拠としてもち出されるのが、気分や体調、うつかり、忙しさです。「あのときは体調が悪く、本来の私ではありませんでした」や、「忙しさ続きで、うつかりしていました」です。この言い方の裏には、「本来の自分であれば、そんな失敗はしません」というような、微妙な傲慢さが隠されています。

このようなさまざまの(いいわけ)の到達点が、はじめに述べた嘘です。(いいわけ)

は嘘と地続きなのです。

〈いいわけ〉と嘘で壁をつくってしまつて、反省や内省が生まれません。嘘と〈いいわけ〉で、失敗は失敗を呼びます。どこまで行つても、失敗の連続です。

論語でいう「小人の過つや、必ず文る」のとおりです。あやまちは誰にでもあります。大切なのは、そのあとです。小人の場合は、犯したあやまちを改めようとはせず、必ず弁解します。その結果、第二、第三のあやまちが繰り返されるのです。

〈いいわけ〉は絶対しないと、胆に銘じた生き方をしていれば、進む道は間違いなく成功に続いています。

〈いいわけ〉をしない心が、三味線のお師匠さんがいみじくも言つた素直な心です。あるいは、森田正馬が推賞した「純な心」といつてもいいでしょう。小賢しい知性によつて歪められない、偽りのない心が「純な心」です。

今の時代、素直さとか純粹といった性向は、どこか小馬鹿にされ、人の口にさえおぼりません。はなから無視されています。

知恵や工夫、ひとひねりした策、奇抜な考え、いつでも人のあげ足をとつてやろうと待ち構えているような、濁つた知性、複雑な心こそが高等だと考えられがちです。

「純な心」、素直な心は、人の心の原点です。赤ん坊はみんな、この心をもっています。

嬉しいときは笑い、悲しいときは泣き、ほめられたら喜び、叱られたらしよげます。それでも「純な心」で、新しい経験を懸命に身につけようとして努力します。〈いいわけ〉とは無縁の心です。だからこそ、無力でありながらも、周囲の大人の注意をひき、かわいいと思わせ、大人の援助の手が伸びてくるのです。

小憎らしい赤ん坊など、誰ひとり構つてやらず、世話もしてやらないので、生き続けられませんか。

素直な心、「純な心」は、無力な人間がもつ、最大の武器なのです。

にもかかわらず、人は成長の過程で、この資質を少しずつ失つていきます。

両親が大切に行っている花瓶を割つた子供は、素直な心をもっている間は「ごめんなさい」と謝ります。しかし、悪知恵がついてくると、友だちと遊んでいたら、投げ倒されてぶつかり、花瓶が割れたという、嘘の出来事を考えつきます。親も、その友だちを呼んで叱りつけるわけにはいかないので、一件落着させるしかありません。子供はこうやって、嘘といわわけの効用を学習していくのです。

あるいはまた、割れた破片をうまく接着剤でくつつけて、知らぬ顔の半兵衛を決め込むかもしれません。

「純な心」、素直な心は、年をとるに従つて薄れていきます。「純な心」を保つには、不断

の心がけが必要なのです。

素直な心は、一見すると、損ばかりする心のように誤解されます。その実、これほど自然で、安楽な心はないでしょう。

あつ、大切な花瓶を割ってしまった。散らばった破片を手にとってみただけれど、全部を元どおりにするのは不可能です。ここは両親に告げ、ごめんなさいと言うしかありません。これが自然な心の流れであり、何の飾りもない、間違いのない事実に沿った行動です。これ以上の安らかで清らかな「純な心」はないでしょう。親から叱られ、頭を下げる一連の過程で、反省と内省が起り、二度と同じ失敗は繰り返すまいと心に誓うはずです。

花瓶を割ってしまった。申し訳ない、悪いことをした。この心の動きが、禪の言葉でいう「初一念」です。正馬はこの「初一念」の大切さも強調しました。「純な心」、素直な心で、物事に向かい、瞬時に開けた心境をさします。

失敗した、何か良いいいわけはないだろうかと考えるのは、第二念、あるいは第三念であつて、不純な思考の加工が加わっています。最後に行きつくのは、迷妄です。

事物に対峙してはじめに生じる感じを、私たちはつい忘れがちです。曇りのない眼で世界を見るべきなのに、人は「成長」の過程で、色眼鏡をいくつもかけるようになります。

「初一念」の、ハッとした感じは、常に心がけておかなければ、淡雪のように消えてしまいます。

素直な心と「純な心」、そして「初一念」は、この世に生まれたとき誰もがもっている心です。この天与の宝物を忘れずに、万事に対処していくと、物事は決して悪い方向には進みません。多少横道にそれたとしても、また次の瞬間には、まともな本来の方向に立ち戻ります。

花が美しい。山がきれい。空気がおいしい。若葉が目にしみる。鶯の声が聞こえた。谷川の水が冷たい。

あるいは逆に、ものすごい坂道、恐ろしい断崖絶壁、真つ暗闇でも、構いません。「純な心」で、そのまま感じればいいのです。

向こうから苦手な人がやって来る。それはそれで、嫌だと思ふかもしれませんが。それでも、すれ違いざまに、頭を下げ、挨拶をかわす。

大勢の前に立って、ひとこと何かを言わなければならぬとき、瞬時、嫌だと思ふかもしれませんが。でも、それはそれとして、役目を果たせばすみます。あれやこれやと、手立てを講じるのではなく、最初の感じを感じとり、そのまま、突き進むのが、自然の成り行きです。

突き進んでいくうちに、苦手の意識、嫌悪感も変わっていくかもしれません。

いいわけをしない心、素直な心、「純な心」を常に保ちつつ、「初一念」の感じを大切に生きる。——考えようによっては、これ以上の楽な生き方はないのかもしれない。

さしたる努力も要しない、楽であつて、しかも正しい、人としての成長に結びつく生き方。その基盤をなすのが、(いいわけ)のない「純な心」なのです。

平成 28 年度入学試験 小論文「出題意図」

(入試情報公開用)

人間発達文化学類 私費外国人留学生入試 【人間発達専攻】

文章の理解力、文章から論理を構築する思考力、そしてそれを的確に表現する力を見ると同時に、記述した内容と形式から、人間の発達を将来支援する際に必要な資質や適格性を総合的に判断します。

第一問では、資料を要約させることを通じて、文章の理解力・表現力を見ます。

第二問では、文章の内容を自分の経験に引きつけて理解する能力を見るとともに、人間発達支援者としての資質を見ます。

また、全体を通して、日本語能力を見ます。

面接資料

この部分に記載されている文章については、
著作権法等の問題から公表することができま
せんのでご了承願います。

平成 28 年度入学試験 面接「概要とねらい」
(入試情報公開用)

人間発達文化学類 私費外国人留学生入試

【人間発達専攻】

日本語の理解力および人間発達支援者としての必要な資質や適格性、学ぼうとする意欲や態度を、これまでの学習経験や小論文の記述についてなどを質問することを通じて、総合的に判断します。